

長流歌学の時代性

— 下河辺長流の歌学および和歌の近世的意義について —

高 浜 充

下河辺長流に関して、その学者的方面と歌人的方面にわたって、全般的にその歴史的近世的足跡はどんなであったかということについて、検討してみたいと思う。

近世和歌の革新的歴史を叙する場合には、木瀬三之、戸田茂睡と共に、下河辺長流の業績から筆を起すことが常識となっている。長流の革新的業績については、高く評価されてきたようであるが、又案外彼の思想は古いと言う説もあるようである。何れにしても、三之や茂睡に比すれば、長流の業績は幅が広く底も深い。中世の伝統的文化の流をうけて、近世初期における新しい文化への転換期に位置して、古典の学問的研究としての歌学に於ても、和歌の文芸的評価としての歌論についても、又実作の和歌の様式に關しても、長流は新時代的な役割を担っているということができるであろう。歴史的変遷の過渡期においては、何人といえども、その意識や情緒に、古さと新しさと混在することはまぬがれないことである。これらの点について、長流の業績が、どれほど古くどれほど新しかったか、又近世初頭の変動期におけるその時代性や歴史的意義はどうであるか等について考察してみたいと思う。

まず最初に、中世歌学の時代性を最も著しく示している古今伝授等の秘伝口伝については、長流はどんな考を持っていたかについて考察してみたいと思う。文献的実証を求めめるために、次に彼の著書の中から、徴証を挙げて検討することにする。(長流の著書は朝日新聞社発行の長流全集を主として用いるが、之は略して単に全集と記すことにする。)

長流の著書の中には、彼が秘伝口伝を尊重したと思われる例証が数多く見られるので、次にそれを列挙してみよう。

長流の著書は成立年時の明らかなものと、不明なものがあるが、出来るだけ年代順にあげることにする。伝授觀の見える著書の中で最も早いものは、萬治二年(三五才)の年に成った歌仙抄である。長流の年行は、その貞享三年に大阪で歿した年の年令を六〇才、六一才、六二才、六三才、の何れかにすることによって異なるわけであるが、こゝでは六二才歿として逆算した年令によることにする。

長流は正保四年、二三才の年に、木下長嘯子を洛西小塩山に訪れて入門し、承応二年二九才の時、京都の三条西家に青侍として仕えた

が、それから六年目の三五才の時書いたのがこの歌仙抄である。この歌仙抄の中には、彼が伝授を尊重したと思われる例証が見られるので、それを次に挙げる。(仮名遣、文字はすべて原文のまゝ、記す。以下同じ。)猿丸大夫の「遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな」の歌の註釈の文の中に、

よふこ鳥は古今三鳥のその一つなれば、つたへをうけずはしるへからず。色々にいひをく説共はみないたつらこと也。(中略)とかくならひ不得はわかまふへきにあらす。(全集上巻二三七頁)

又同じ歌仙抄の中で、藤原興風の歌「誰をかも知る人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに」の歌について次の様に記している。

猶くこの歌には別して秘蔵のおしへ待る也。口伝をうくへし。

(全集上二四五頁)

次に長流三八才の寛文二年に成立した「万葉集管見」にも亦、伝授を肯定した文が見られる。

もよ草は先賢の伝別に有。(全集上一八九頁)

とのみ記してその説を記していない。

次に「枕詞燭明抄」は、寛文十年四六才の時刊行されたので、書かれたのはその前であろう。これには後撰集の口伝を受けたかと思われるような文がある。それは、「あしびきの」という枕詞の註釈について、

是は日本紀の抄の説、亦後撰集の口伝にも侍る儀也。(全集上三

六九頁)

次に成立年時は不明だが、「百人一首三奥抄」には、菅家の「この度は幣もとりあへず」の歌に註を施した後で、

是大底の説なり、正説は口伝を受へし。(全集上二六九頁)

又実朝の「世の中は常にもがもな」の歌について、

百人一首の中に別傳の歌おほしといへとも、これは取分、和歌の本意、人丸の骨髓をも得たるうたにてあれば、祕か中の極祕なり。此歌におひてわたくしに註釈をつくるものは、もとより百人

一首の心を知らざるものなり、知者不言、言者不知、老子経詞を以、これをつたへらるゝうたなり。(全集上三〇五頁)

と記して註釈を施すことを省略している。又この部分に対しての契沖の書入には次のようである。

この歌をこにかくまで秘蔵にいひて、二首の本歌までを引ながら積せさりけるは、彼或御傳の書によりてそ申つらん。この上はともかくもいひはたらかすまじきことなれと、此歌にかきりて、

さしも別に灌頂法門などのことく、甚深微妙の事ありて隠密するには侍らし。(全集上三〇五頁)

と言って、契沖は長流を批判している。次に之も成立年時不明だが

『四季出題抄』には、立春と言う歌題の説明に、

おほよそ年月立春の外に立春と出せる題は正月朔日のことを云なり。口傳を得てしる。(全集上五三二頁)

又旧年立春という歌題の注には、

古今集巻頭のうたに年内立春と載られたれといまは冬の心なり。

古今集の口傳をうけさらん人は是をしるへからす。(全集上五四一

頁)

古今伝授その他に関して、長流が誰かに伝授を受けていたことと、それを尊重していたと思われる徴証は以上の通りであるが、次に彼

が万葉集の伝授を自ら行ったのではないかと思われる様な文献もある。太田覃編増訂一話一言卷四には、貝原元端が、長流門弟の五井加介に宛てた書簡に、(橋本進吉先生編長流伝記資料による。)次の様な文が見える。

下河邊長流老猶堅固に御入候哉足下にも萬葉之御傳授被成候はんと奉察候其外萬葉之傳授を得申衆幾人御座候哉承度候 (全集下二〇三頁)

之によれば、長流が門弟に万葉伝授を行ったらしく思われるが、この伝授と言うのは、中世の古今伝授と同じ様なことを行ったのだと思えば思われぬこともない。併し傳授と言う語は、教授と言う意味の用語例もあるから、伝授と言ったからといって、直ちに秘伝口伝を意味すると考える事は早計であろう。右の文の伝授は、如何なる意味の事を指すか断定し難いが、仮りに秘伝口伝的性質のものであったとしても、中世の古今伝授の考え方は、本質的に異なるものがあると思われる。中世の古今伝授は、先人の学説を機械的に受け継いで、そのまま伝えて行ったという点、および、杜撰な内容の学説を秘伝として、自己の無力を權威づけようとするものであるが長流の場合は、自分の独創的新説を、特に優秀にして親近な門弟子だけに、最初に教えてやろうという考えのもとに、伝授類似の教授を行ったものと推定することができる。

この種の事は契沖にもあった様である。今井似閑の萬葉緯卷二十によれば、(契沖全集八卷九五頁)『萬葉集第一巻極秘伝授新点 and 歌一首』と標題をつけて、額田王作歌の難訓の歌「莫憂円隣之大相 七儿爪謁氣」の訓として、『マガヅリノ オホヒナセソクモ』

と言う訓み方を、契沖から極秘伝授を受けたと記している。この事情について考証してみれば、契沖が万葉代匠記の初稿本には、仙覚や長流の説の通りに、『ユフツキノ アフギテトヒシ』と訓み、精撰本代匠記に、『ユフツキシ オホヒナセソクモ』と独自の訓を附けたが、その後に至って、右の様な『マガヅリノ』の訓を思いついたらしい。契沖は新しい訓を思いついた時は、水戸光圀に最初に内密に知らせていたそうだから、この場合にも亦水戸侯に知らせると同時に、似閑にも内密に教えたのであろう。光圀の編んだ『釈万葉集』にも、『マガヅリノ』という訓がついている事でもそのことが推定できる。右の様な事情の事を、今井似閑が契沖から秘伝を受けたと称したものと思われる。伝授思想を否定していた契沖が、中世の秘伝思想を持っていたとは思われぬ。彼は新説を大切に、最初に親近者に教えてやろうと思っただけの事と推定できるのである。長流の場合の万葉伝授という語も亦、之と同じ様な意味に解釈するのが至当であろうと思う。

以上は長流が秘伝口伝を尊重したと思われる徴証を挙げたのであるが、次に彼が伝授思想を否定した事に關しては、夙に佐佐木信綱先生が、明治四十三年発行の、日本歌学史に、

長流その人も契沖が古今余材抄の序の部に附記せる文中に明らかに、口伝秘伝など言へるは愚かなることなり、と言ひをれるが、(日本歌学史二五七頁)

と明記して居られるし、又久松潜一先生の、日本文学評論史によれば上賀茂文庫蔵の古今余材抄書入には、次の様にある由である。

長流曰(中略)今宗祇の切紙などいへる物は大かた顯注密勘の内

より出たり（中略）口伝秘伝などいへるはおろかなる事也（日本
文学評論史近世編七五七頁）

契沖の古今余材抄は元禄四年成立である。この年は長流が歿してから五年後である。余材抄の書入に、長流曰とあるのは、長流の言を何時契沖が聞いたのかわからないが、おそらく長流の晩年の事であろう。長流は若年の頃は口伝秘伝を尊重していたが、晩年に至って伝授否定の考に変わって行ったものと思われる。

長流は二三才の時木下長嘯子に入門している。長嘯は細川幽齋について古今伝授を受けているから、長流も長嘯子から古今伝授を受けたものと思われる。また彼は二九才の時京都の三条西家に青侍となつて仕えた。目的は三条西家にある万葉集の古註本を写す事にあつたらしいが、森銚三氏の『新資料による下河辺長流の研究』によれば、この後六年乃至十四年間の永い間仕えていた様である。（国語と国文学昭和六年四月号）三条西家は二条派歌道の古くからの名家であつて、宗祇から古今伝授を受けた三条西実隆の子孫である。長流が同家に仕えた承応元年には、当主の三条西実教は三四才であつた。言うまでもなく実教は家代々の伝授を伝えていた事は確かである。長流は同家に青侍の身分ではあるが、永年の間仕えていて、主人の実教からこの方面の伝授を受ける機会がなかつたであろうか疑問である。長流の残した文献の上では、『枕詞燭明抄』の序の中に日本紀風土記旧事紀古事紀古語拾遺万葉の古鈔、古人髓腦の教々ことには三条内府実隆公の御説を用たり。（全集上三六七頁）とあつて、三条西実隆に敬語を使い、その学説を用いているのを見れば、三条西家の家学の影響を受けていたかとも思われぬこと

ないが、この他には、その様な徴証が別に見当たらない点から考えると、長流が三条西家から伝授を受けたとは考えない方がよいだろう。長流はそれ以前に木下長嘯子の門弟になつていて、彼は生涯長嘯子を尊敬し心酔していた様であるから、長流が古今伝授を受けたとすれば、それはやはり長嘯子からであろう事は断定してよいと思

う。
芸道を家の遺産の如く代々伝えたり、秘伝と称して口頭で伝えたり切紙で伝えたりする事は、文化が行きづまって持開の道がなく、伝統を墨守する事のみによつて、空疎な權威を維持しようとする低劣な習慣である事は言うまでもないことである。近世初頭の文化転換の時期に當つては、かような因襲から脱却する事が第一であることも勿論であるが、木下長嘯の如き人でも、その和歌の実作に於ては、従来の二条派歌学の制詞の法を破壊して顧みなかつたにも拘らず、細川幽齋から古今伝授を受け、幽齋には敬意を払つて交際を続けていた様な時代の姿であつた。その長嘯子の指導を受けた長流が壮年の頃伝授肯定の思想を持っていたとしても、怪しむに足りない事であろう。併し晩年に伝授否定に変わつて行つた事は、時代の變遷の姿を、彼が身を以て反映していると思われることができるのである。

長流がどういふ動機で伝授否定に転じたかについては確かな徴証はないが、佐佐木信綱先生の『和歌史の研究』によれば、木瀬三之は茂睡長流より先輩であつて、早く『古今伝授などあるべからず』と称しているそうである。（和歌史の研究三〇三頁）長流が之等の影響を受けたか否かはわからないが、長流もその師長嘯と同じ様に、その和歌の実作に於ては、自由な歌風を示し、二条派歌学の制

詞等には拘泥していなかった点から考えても、彼は外的な影響を受けなくとも、研究体験の結果として、自覚的に伝授否定の考に転ずるに至ったと推定する事が、真実に近いことであろう。

尚右に述べた様に、二条派歌学の伝統たる制詞の破壊は、木下長嘯子および長流が、その実作において実行しているのであるが、之は茂睡が制詞破壊を宣言した『寛文五年文詞』より時期が早いのである。いわんや茂睡の梨本集の成立した元禄十一年は、長流が歿してから十二年後であるから、茂睡よりも長流の方が先覚者と言うことができる。長流には伝授思想の残滓はあっても、二条派歌学の中世的因襲から脱却して、近世的歌学へ転換して行く時代の、先頭に立って歩んで来た歴史的存在としての意義は認めることができるであらう。

二

次に長流は先輩学者の学説ならびに古歌人の歌風に対して、どんな見解を以て臨んだか、又古典に対してはどんな考を持っていたかについて、調査検討してみたいと思う。まず長流の名著である万葉集管見と萬葉集鈔に引用してある先達名について調査して、彼が先達の学説に対して、どんな考を持っていたかを検討してみることとする。

引用した 先達名	その説を 継承したもの	批判、否定 したもの	計
顕昭(顕昭が袖 中抄とあるもの を含む)	13	5	18

或 説	或 抄 物	先 賢	先 達	清輔(清輔奥義 抄とあるものを 含む)	俊 頼
6	3	10	2	5	4
10	9	3	6		
16	12	13	8	5	4

右の外に、俊成、定家、能因歌枕、八雲御抄、和名抄、無名抄、童蒙抄、或云、一説、喜撰か和歌式、とあるもの各一回宛ある。

右の調査の結果によって見れば、長流は顕昭の説を最も多く引用していることがわかる。その外には、清輔、俊頼の説を多く用いている。そして之らの人々の説に対しては、大部分そのまま継承し肯定していることが注目される。この事によってみれば、長流は六条家歌学とか俊頼の様な進歩的歌人の説に、心を寄せていたことがわかるのである。

次にその名を挙げないで単に先賢と称して引用したものが多く、之も亦その大部分を肯定している。尚この先賢の説を引用する場合には、万葉集管見に於て、

先賢のつたへに云（中略）可祕々々（全集上七二頁）
も、よ草は先賢の伝別に有（全一八九頁）

と秘伝を受けたらしい事を記しているし、又稀に先賢の説を批判する場合にも、

先賢のつたへに背くへきにあらね共（全九一頁）

とことわりながら、その学説を批判している。この事から考えると、先賢と書いているのは、『僻考集』に師説と書いているのと同一人であろう。それが何人であるかわからないが、多分木下長嘯だろうと推定されるのである。要するに彼は、俊頼、顕昭、清輔、長嘯子等の進歩派の学説に忠実であることがわかるのである。

次にその名を挙げないで或説、或抄物、先達と記した人の学説を数多く引用しているが、之等の学説に対しては、肯定したものよりも批判し否定したものの方が遙かに多いのである。之らの説は、氏名を明記した古人以外の多くの人々を含むものと思われるが、長流の先達の学説に対する自由な批判的態度がうかがわれるのである。

全般的に見て、長流の註釈の方法は、古人の学説を色々挙げて、それを比較対照して批判し、又古典の中に文献的徴証を求めて、自分の見識を以て判断するという方法をとっているのである。この捉われない自由な研究態度が、中世の因襲的思想から脱却して、客観的科学的方法を拓いたものといえることができる。この点は国文学研究史上における近世的意義の著しいものであって、長流から契沖を経て近世国学者たちへ流れて行った歌学における新しい方法論の濫觴となっていると言ふことができるのである。

以上は古人の学説に対して、どんな意識を以て臨んだか、および

長流歌学の時代性——下河辺長流の歌学および和歌の近世的意義について——

学問研究の方法論についてはどんな見解を持っていたかについて考えてみたのであるが、次に長流は古典そのものに対してはどんな見解を持っていたかについて考察してみたいと思う。森銚三氏によれば、長流門下の風竹の手記に、次の様に記してある由である。（国語と国文学昭和六年四月号、新資料による下河辺長流の研究）

門弟に示す学問の次第、詠歌大概にいへるがごとし。古今伊勢後撰拾遺詠歌大概小倉百首若有余力ば、三十六人の歌集、右麴字を得たらば、萬葉先文字よみして後に学べと也し、源氏物語はさのみ頭賞せられざりし。

之によつて、歌学を勉強する順序として、三代集あたりから初めて最終的には万葉集に至るべきであるという見解を持っていた事がわかる。

又初学者の作歌の参考のため、古歌を抜萃して分類収録した『材林和歌抄』の序文には、

皆これ古き世のうたを用ひて、ちかき歌をのせさることは、規範とするにかたければなり。いはゆる萬えうしふをはしめて集は古今後撰拾遺に及び、並に紀氏六帖歌仙世六人の家の集堀河院両度の百首のうたをあく。また曾丹か集、としより朝臣の家の集は、たくみに萬物をよめるところ、尤見ならふへきにして是を副たり。（全集上六五五頁）

之は学問の方法でなく、和歌制作の方法について述べたのであるがやはり三代集や万葉集等を目標としている。ここでは特に源俊賴や曾根好忠の家集の歌が、素材が広く典型的でない点をあげて、作歌の模範とすべき事を述べている。こゝでも亦革新的歌人の歌集を特

に重んじていることがわかるのである。又長流が作歌の模範として万葉集を重んじた例証としては、『万葉集名寄』の序文に、

上りての代の風躰は、うたの林に木かくれことの葉の海に水こもりて、はかりかたきことのおほかるを、よく此集をうかひ見すはいよ／＼しき島の道はくらきにそまよひ待へき。なかれの末の浅きをはくみしるといへとも、そのみなもとのふかきをきはめす、さてのみやまん人、いひかひなからすやはある。(全集上五 四二頁)

と記して、作歌を習うには和歌の根源たる万葉集によるべき事を強調している。この書は万治二年三五才の時の著書であつて、長流の著書の成立年時のわかっているものゝ中では、土佐日記抄について二番目に早い時期の著書である。この年は彼が木下長嘯に入門してから十三年後で、西山宗因に教を乞うてから九年後、又三条西家に仕えてから六年後に当るが、彼が此の頃には既に万葉研究に志を確立し、その研究もかなり進んでいた事がわかる。

然らば長流が万葉集研究に専心するに至った動機は何であつたのだろうかということについて、こゝで考察してみることにする。まず当時勃興した儒学の古学派の影響を受けたのではないだろうかということが考えられる。

山鹿素行や伊藤仁斎等によつて、その頃宋儒の思想から脱却して儒家の基本的古典に溯つて直接に古義を明らかにしようとする学問の方法が興つたので、その刺激を受けて、歌学に於ても万葉の古きを溯るべきだと、考えついたのではなからうかということが一応考えられるので、この点について検討してみよう。長流の万葉集管見の

できあがつた寛文二年(長流三八才)の年には、山鹿素行は四一才で、ちようどこの頃程宋学を否定して、聖学と称する古学に転向したばかりであつて、門人が山鹿語録を編輯し初めたのは翌年寛文三年十一月頃からであつた。又聖教要録を刊行して古学を提唱したのは寛文五年であつた。この事によつて考えると、山鹿素行が古学に転向した以前に、長流は万葉集管見を書き上げていたことがわかる。

又古義学者の伊藤仁斎は、この年三六才で、ちようど堀河塾を開いたばかりであつて、論語古義、孟子古義、中庸發揮を書いたのはその翌年の寛文三年である。刊行されたのはずっと後の正徳享保年間である。尚荻生徂徠は寛文六年に生れていたので、徂徠の古文辞学の行われたのは、はるかに後代のことである。

右の事実によれば、長流が万葉集研究に志したのは、儒家の古学派の復古思想の影響を受けたためではない事は明らかである。むしろ長流の万葉研究は儒家の古学に先行するものと言ふことができるのである。

次に長流が先達の影響を受けて万葉研究に入ったものとするれば、第一に考えられる事は、彼は木下長嘯には心酔していたから、長嘯の革新思想の刺激を受けたらうということである。又古人については、京極為兼を重んじていた事も事実であるから、為兼の万葉尊重思想の影響を受けた事も考えられる。併しこゝでもう一つ留意すべきことは、当時の時代的環境である。戦国乱世の時代が江戸幕府によつて統一され、平和の到来と共に文運復興の機運に向かい、中世文化の欠陥に対する自覚が生じて、改めて因襲的伝統以前の文化

の根源に溯つて、文化の本質を見直そうという意識が時代思想として起つてくることは自然の勢である。寛永本万葉集の刊行等もその一端の表れであろう。かような時代の動きをいち早く肌を以て感じとつて、長流の万葉に対する関心が喚起されたということも考えられるのである。

次に作歌の方面に関して、長流が古歌人の歌風に対してどんな見解を持っていたかについて考察してみたいと思う。好忠、俊頼、顕昭、清輔、長嘯子を学者として又歌人として、長流が尊敬していた事は右に明らかにしたのであるが、この他に実朝、為兼を重んじている。実朝に対しては、『百人一首三奥抄』において、その『世の中は常にもがもな』の歌の説明の文の中で、

右鎌倉右府は定家卿門弟の中にも、ことに執しおもはれたるゆへに、和歌よみかたの教も世人にこととなり、生れなからにして人丸赤人の風骨を得られたれば、ひとへに万葉の古意をもつて伝授せらるゝこと両度に及へり。其古意を得たる所の奥義、ことに此歌にあれば、門弟子あまたか中に此右府一人の歌を載られ、黄門自身身の歌よりもさきに出さるゝは其ゆへなり、(全集上三〇五頁)

と言つて、実朝が優秀な歌人であるし、万葉風の歌風を体得している点を指摘している。これは賀茂真淵等が実朝を推賞した事よりも遙かに早い時期に於て、実朝の真価を認めていたわけである。長流の万葉や実朝に対する理解の優れていた事を示すものである。

京極為兼を重んじていた事は、長流自撰歌集の『長流和歌延宝集』(延宝九年五七才成立)の中には、『為兼の体にならふ歌』という詞書の歌を三回も出している事によつてもわかる。右の様な事実

によつて考察すれば、長流は学問研究の方面では、万葉集に力を注ぎ、又古歌人の歌風については、革新的進歩派と目されている人々を重んじていた事がわかるのである。

こゝで長流の学問が後世の学者たちに与えた影響について一瞥してみることとする。契沖は万葉代匠記の初稿本に於て、長流の学説を忠実に継承しているのみならず、契沖の初期の著書は長流の説を祖述したものが多し事は周知の事実である。近世万葉学の基盤を大きくうち建てた契沖の学問が、その源は長流から流れ出たものである事は、明らかに認められるところである。又大石新氏の『万葉集管見と万葉集僻案抄』(国語と国文学四卷二号)によれば、荷田春満は長流の萬葉集管見の説を一説又は或説として引用しているが、殆どその説を否定しているけれど、春満が長流や契沖の学説の影響を多けた事は見逃せないと指摘して居られる。

かような事実によつて考察すれば、長流が万葉集に心を寄せた事又その研究の態度に於て伝統に拘泥せず自由な批判的方法を樹立して、近世の新しい歌学の端を開いた事は、好忠、俊頼、六条派歌学為兼、長嘯と流れて来た前代の歌学者乃至歌人達の進歩的革新的精神——各々時代的にも色彩や程度の相違はあるが——の歴史的展開の後を承けて、近世初頭に至つて、長流歌学としての新しい時代性となつて発現したものであると言ふことができる。而してその流が又、契沖によつて継承され確立拡大されて、客観的科学的的方法論を基盤とした新しい近世歌学となつて、近世国学者へと流れて行ったものであると言ふことができるのである。

次に、文芸としての和歌はどんなであるべきかについての長流の歌論と、彼の実作の和歌の歌風はどんなであったかについて考察してみることとする。

長流はその著『歌仙抄』および『百人一首三奥抄』において、三十六歌仙および百人一首の註釈を施しているが、その中に随所に歌風の批評を記しているので、それによって彼の歌論を考えてみることにする。

第一に、実感を直叙した写実的な歌を推賞していることが注目される。

歌仙抄に於て赤人の『若の浦にしほみちくれば瀉をなみあしべをさして田鶴なきわたる』の歌に対して、

眼前の景を有くとよめる歌也（全集上二三四頁）

とその客観的写実を指摘している。又紀友則の『夕さればさほの河原の川風に友まとはして千鳥なくなり』については、

かやうのうたは其所にのそみて千鳥のこゑをきく時節のていを言ひ立てたるばかりにて、をのつから感情はこもれるものなり。（全集上二二六頁）

と言つて、写実的叙景の中に情緒のにじみ出ている事を推賞している。源公忠の『行きやらで山路くらしつ時鳥今一声のきかまほしさ』の歌の批評には、

たくみに言ひ立てんとしたる歌のさまにはあらで、ほととぎすに執ねきこと是より上は有ましくや。（全集上二四〇頁）

と言つて、技巧的趣向を凝らさないで、強い感動を与える作風を推賞している。坂上是則の『みよしの山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり』の歌については、

古郷さむくとよめる詞何となく旧都のあはれをふくみて感情ふかきうた也。聞えたるまゝなりとて浅く思ふへからず（全集上二四五頁）

平淡なる叙景の中に深い情趣のこもっていることを指摘している。

次に『百人一首三奥抄』に見える例証を挙げれば、赤人の『田子の浦に打出て見れば』の歌に対して、

有のまゝに詠したれども、其所の景気もとよりすぐれたれば、歌も奇異にきこゆるもの也。所のさまをいふ時はみえたるまゝにひのふること、からの歌におほくかくのこし。（全集上二五六頁）

こゝでも亦ありのまゝに直叙した叙景歌を推賞している。以上の例によつて知らるゝ如く、長流は技巧的趣向のない客観的描写の叙景歌の中に深い情趣がこもっているとして、写実的の歌風を推賞している。之は言うまでもなく万葉歌風に通ずるものである。万葉集管見や万葉集鈔に於ては、注解を主として、歌風の評価は殆ど記していないので、万葉の歌風に対する具体的見解は見る事ができないが前にも述べた様に、実朝を万葉の古意を得た歌人として推賞し、万葉集を作歌の模範とすべしと言つている事と併せ考えると、長流はやはり万葉歌風の文芸的評価について、正しい理解を持っていたといふことができる。

第二に注目される事は、歌の詞の技巧や着想の趣向を推賞してい

ることである。歌仙抄に於て、人麿の『ほのく』とあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしそ思ふ』歌に対して、

ほのくとは夜のほのかに明はなる、心を則所の名にいひかけてさて朝きりとつゝけ、島かくれ行とうけたる詞つかひ、まことに凡慮の及ふへき所にあらざる歟。(全集上二三二頁)

と言つて懸詞を推賞している。紀貫之の『桜ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪を降りける』の歌については、その知巧の趣向に對して、

まことに有かたき風躰の歌也。(全集上二三二頁)

と言つて推賞している。斎宮女御の『琴の首に嶺の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん』の歌については、

其心おもしろくしてやさしき歌の風躰なりとし古来亦美しける歌也(全集上二四二頁)

と言つて技巧的趣向に對して、その心おもしろしと推賞している。

『百人一首三奥抄』を見れば、源経信の『夕されば門田のいなばおとづれて』の歌について、

心なき風に心をあらせてよめる感情おもしろき歌也。(全集上二九六頁)

と言つて擬人法の技巧を感情おもしろき歌と推賞している。以上の例によつて彼が知巧の歌風に對して、その技巧的表現や着想を高く評価していることがわかる。この事實は前にも述べた様に、彼が三代集あたりの歌を詠歌の模範として挙げてゐる事と照応するものである。

長流は作歌の目標として、万葉集を挙げると共に、三代集をも挙

げ、更に好忠、俊頼、為兼等をも挙げてゐる。歌風の異なるもの、特に相反するものを同時に是認することは矛盾する様であるが、実はそう断定することは早計であろう。古典を学問として研究する場合にも、又文芸として評価する場合にも、之を客観的態度で評価するならば、それ／＼に長所もあれば欠点もあるものであつて、各々の古典にそれ／＼独自の時代の存在価値があつたのである。自己の文芸的立場のみを主張するために、自己の見解を規準として論ずる場合の主観的評価ならば、相反する作風を同時に推賞するということは自家撞着となるであろう。長流の場合は学者的客観的立場に立つて、広く古典をあるがまゝの姿に於て評価したものと見ることが出来るのである。この点においても長流の学者的本領が見られると思ふのである。

次に長流の和歌の作品について考察してみよう。長流の和歌は延宝九年(天和元年)五月二十日に出来た『長流和歌延宝集』がある。之は自撰歌集で『長嘯歌選』『契神和歌延宝集』と共に、三家和歌集と称して三巻本として伝つたもので、自撰晩花集とも言われる。今一つは長流が歿した貞享三年の年にその歿後成立したもので『晩花和歌集』上下二巻である。之らの書によつて長流の歌の歌風について検討してみることにする。

まず彼の作品の特色として第一に感じられることは、その用語や着想が、自然清新で捉われる所のないことである。(和歌の引例は文字、仮名遣をわかりやすく改めることにした。)

雪をわけ水をくたく手間をのみ摘みし若葉は籠(こ)にもたまらず

海も見よ桜もならへとばかりにまづ散りそむる春のあは雪
曇り日の目にこそ見えね春雨の降るか朝けの風の露けき
今朝消えし垣根の雪のたまり水野沢に似たる若葉をぞ摘む
この扱われぬないザックバラ調が、更に進んで諧謔味となったもの
も多い。

河上に洗ふ若葉の籠(こ)をあらみ洩るを拾ふぞ摘むにまされる
くらぶ山圍をたよりと盗み出て風のもて行の夜の梅が香
旅にして妻恋すらし片岡の雉もかれ飯のほろゝとぞ鳴く
諧謔的な歌は意識的に好んで作ったものと思われて、延宝集には古
今集に倣って、物名歌、俳諧歌の部立を設けている。俳諧歌の中や
ら一首だけ例をあげる。

をみなへしをよめる

女郎花咲きぬる時は野辺ごとく粟の飯をぞ虫も鳴きける
右の様な扱われぬない表現、ザックバラ調、諧謔味という作風は、
木下長嘯の歌風に於て見られる所であるから、師匠の歌風をうけつ
いだものである。又長流は若年の頃、慶長年間に、大阪に於て西
山宗因に教を乞うているので、談林風の影響をもうけたものと思わ
れる。長嘯子も宗因も、長流と共に中世の伝統的文化乃至貴族的文
芸趣味に対して、反撥を感じた点で相通するものがある。堂上の袴
を脱いで、因襲の規範から離れたい意識が、かような作風となつて
表れたものだと考えることができるであろう。

次に長流の歌には三代集あたりの知巧的趣向のある歌が多く見ら
れる。
鶯の声する竹は折らじとてうすくやかゝる春の淡雪

起き出でばさわざやすると鶯の声ゆゑいとど朝寝(い)をぞする
梅の花人のとがむる移り香もしづ枝の露のきせし濡れ衣
桜色に衣染めては春風の袖吹くをだに厭ひつるかな
花も根にかへるを見てぞ木のもとに我も家路を思ひ出でけり

これらの歌には万葉的歌風は見られないし、又新古今調の餘情妖艶の
色彩もない。やはり三代集あたりの歌風に通ずるものがある。

又長流には長歌の作がある。長歌は久しく作る者がなかつたのを
復興した点で、万葉風を興したと見られない事はないが、その歌風
は万葉の長歌よりも、むしろ古今集の長歌の作風に近い。彼は万葉
集を重んじたが、作歌の模範としては三代集あたりを目標としてい
た事は、その歌論に於ても見られる所であるから、古今集の知巧的
な歌があるのも自然の事であろうが、之はまた、当時の歌壇の風潮
から飛躍的に脱け出る程の事は出来なかつたものと考えられるので
ある。この作風も亦、木下長嘯に見られる所であるから、その影響
を受けた事も考えられる。

尚、延宝集には「為兼の跡にならふ歌」と詞書した歌が一首宛三
回にわたつて出してある。

遠き列はただひとすちに見えし雁の近づく空に数ぞ分かる、(秋
歌)

行く年を送りの翹雪に濡れて寒き鳥の夕暮の声(冬歌)

いかにぞと疑ふ日ごろ今日になりて背くかぎりの暮ぞ短き(恋歌)
京極為兼には、二条派の平淡優雅な歌風に反撥して、表現に入りく
んだ技巧を凝らした歌がある。之は時流に泥まない斬新奇抜な風を
試みようとする意識的態度から出たものと見られる。特に中世歌壇

の主流をなしていた二条派の平淡な風に対して対照的な色彩を示している。この傾向は、曾根好忠、源俊頼にも通ずるものがある。右の長流の歌はかような傾向の歌風に倣ったものであろう。この意味に於ても亦、平安朝以来類型化してきた歌壇の風潮に反撥する反主流的革新的意識の歴史の流れが、長流へつながつてきたものと考えることができるのである。

四

長流は寛文十年（四六才）に私撰歌集『林葉累塵集』を刊行し、延宝七年（五五才）に同じ内容の『萍水和歌集』を刊行した。彼は大阪の商人たちに和歌の教授をしていたので、その人々の歌および尊敬する師の長嘯子や親交を結んでいた後輩の契沖の歌を主として集めた歌集であるが、有位の貴族の歌は一切之を載せなかつた。

林葉累塵集の序文に、（文字、仮名遣、原文のまゝ）

世につかき位有人はわかともからにあらねは、その人々の歌にをいてはまれにもこれをすることなし。たゞくらゐなきものゝふの八十氏人をはしめとして、あるは市になふ商人あるは山田につくる農夫あるは木の下岩の上にありかきため桑門の言のほに、さるへきひとふしこもれるをはこれをたつねもとむ。中にもちかくをしほの山の幽栖にして身まかりたまへりし長嘯子のことのは、かの家集擧白集よりふたゝひこれをぬきいたしてこゝにましふることはそのたぐひなき金玉のこゑをもてまきゝのひゝきとなさむためなり。（全集下六二頁）

世に官職位階のある堂上貴族は我々の仲間でないと言って、庶民のみの歌集を選んだ事は、近世の革新思想として夙に指摘されている所である。近世文化の特色は、庶民文化の興隆という点にある。長流が近世初頭に於て、いち早く歌壇の庶民化を堂々と提唱したことは、長流の近世の革新的業績として之を認めることができるのである。

久松潜一先生は契沖伝および日本文学評論史近世編に於て、契沖と長嘯子が豊臣家関係の浪人であり、茂睡、三之、長流も浪人であったから、近世和歌の革新は浪人隠士の手によってなされたと述べて居られる事は、まことに卓見と言わねばならぬ、森銃三氏の『新資料による下河辺長流の研究』によれば、長流の父小崎氏は片桐且元の一族で大和その他に所領のあつた片桐氏に仕えたが、長流自身も若年の頃片桐又七に仕えたことがある由である。そうすると長流も亦、長嘯子、契沖と同じく豊臣家関係の武士の出である。この他に長流が師事した西山宗因も亦肥後の加藤忠広（清正の子）の陪臣であつたが、寛永九年に忠広が改易になつたので、流浪の身となつたのである。狷介の性と言われた長流が尊敬して師事した人々も親交を結んだ後輩も、皆例外なしに豊臣家関係の浪人ばかりである。安藤為章が年山紀聞に、（文化元年刊）隠士長流と標題をつけて長流の伝を書いて以来、長流の名は隠士長流として通つている。この隠士の群を、近世初頭における社会集団としての隠士集団と考へることができらるであらう。この隠士集団の意識は、中世の西行、長明、兼好等を以て代表される隠者文学の思想とは、その本質に於て異なるものがあるのであつて、これらの中世隠者に共通するもの

は、世を避けて自らを高うする老壮思想と無常思想や文人趣味であった。それに反して近世の隠士集團は、時代の政治的經濟的變動のあふりを食って抛り出された人々であったのである。長流は二〇才代の若年の頃から四〇才代まで、少くとも三回は江戸に往復しているが、之は生計上の都合で奔走して、遂に意を得なかつたものゝ様である。京都の公家に奉公したのも、単に万葉の抄本を見たいだけのことではなく、生活上の關係もあつたことだろう。それも青侍の身分で、決して名誉な身分でもなければ、余裕ある生活でもなかつたことゝ思われる。後隠士となつて大阪に住み、新興階級の町人相手に学問や和歌に専心したが、狷介の性に加えて、時代の変動の壓力に押しつぶされた不遇の身であつたことは明らかである。契沖も亦肥後の加藤家の遺臣一族で、父も兄弟もすべて不遇の身分であつた。兄の如水の如きも、晩年には契沖のもとに寄食して、契沖の著作の浄書をしたりしている。これらの人々は総て生活の辛酸をなめた不遇の人々の群であつた。隠士集團の中で、武に秀でた者は徒党を組んで天下騒乱の企を起す者もあつたし、文に秀でた者は庶民を相手に糊口を凌がねばならなかつた。かような社会的環境から、時代の主流的文化と貴族的文化に対する反撥的意識が芽生えて文学革新のいとぐちとなつたと見る事ができるであらう。

長流の万葉集研究とその自由な批判的研究方法、和歌の庶民化、作歌の自由な捉われない作風などの業績は、前述した様な曽根好忠以来流れてきた革新的意思の系列と、当時代の隠士集團の社会意識とが合流して、近世初頭に於て伝統文化に対する批判的意識となり、文化の根源に溯つて考え直すとする復古思想および、因襲的

權威を排して、新興の庶民集團の文化を興そうとする意識が基底となつて発現したものと考えることができるのである。